地域に根ざしたＰＲ活動

安代営林署　○新町森林事務所森林官　石川景子
造　林　係　長　九嶋 勉
造　林　係　高橋昌紀

１　はじめに

近年、地球的規模で環境問題がクローズアップされる中で、国民の森林に対する関心は一層高まっているといわれている。確かにイベントなどでお話を伺っても関心を持っている方は多くなったなと感じる。しかしながら、それはまだほんの一握りであり、森林に囲まれて生活している安代町の方ですらそれほど関心はなく、ましてや営林署や国有林についてよくご存じの方は関係者以外ではほとんどいないというのが現実ではないか、と思われる。

平成９年は林政審議会の国有林改革や行政改革会議等の議論が進められ、国有林もマスコミに多く取り上げられた。これに伴い、国民に最も身近な存在である営林署にも地域住民の多くの目が注がれることとなった。

安代営林署では、こういう時こそ営林署、国有林をＰＲすることが大切であるという観点から、地域のニーズに応えた活動や国有林と地域との距離を縮められるようないくつかの取組みを展開したので、その成果について発表するものである。

２　具体的な取組

当署では地域住民等との交流行事として植樹祭、森林教室、林業体験そしてツアースキーなどを実施しており、このうち学校教育との関わりについては、７年度の研究発表会で報告したところである。今回は地元安代町の観光ＰＲ活動への協力や地域住民等も参加した林業体験など、新たに取り組んだＰＲ活動などを紹介する。

（１）観光ＰＲ活動等への協力

ア　ツアーコースの標識整備

八幡平スキー場から安比高原スキー場までの原生林の中に約５kmのツアースキーコースが設定されており、そこには３０年ほど前にコースを示す標識が設置された。しかしながら、この標識は文字が消えたり、標識自体が風でとばされるなど現在ではツアースキーヤーの道標としての役割を果たせなくなっていた。

当署ではこのコースで一般の方を対象にスキーツアーを実施しているが、参加者からは「ゲレンデスキーにない楽しさがある」という話がよく出され、ツアースキーの根強い人気を感じる。また地元安代町でも、家族で楽しめる安全なコースに整備してツアースキー需要に応えたいという希望を持っていたところである。

当署では町と相談して、まずシンボルである頂上に安代町の名を刻んだ標柱を建ててＰＲする計画をたてた。腐れにくく、地元で木造建築の土台としてポピュラーなクリの木を営林署が用意、設置する経費は町にお願いした。また、設置に際しての環境部局との交渉は営林署が行った。

頂上には国立公園指定時の小さな標柱が設置されており、同じ場所に２つもいらないという指摘を受けたが、環境庁担当官に現地をみていただき、必要性を理解していただいた上で何とか実現にこじつけた。

設置直後から標柱をバックに記念撮影する光景が見られ、現地を訪れた町長もこれで「八幡平の安代町」を観光客にＰＲできると大変喜んでいただいた。

（２）林業体験の新たな試み

植樹祭に森林教室。営林署が地域住民と現場で接する一般的でそれなりにＰＲ効果のあがるイベントである。しかし、植樹祭はともすれば関係者のお祭り、森林教室も特定の学校に限られていたのが当署の実態であった。そこで、森林・林業、国有林にもっと多くの地域住民が接する機会ができないものかと取り組んでみた。

ア　参加者公募による植樹祭

今年度の当署植樹祭は新しい試みを取り入れた。一つは署の行事ではなく町と営林署の合同の行事にしたこと。二つ目は参加者を一般から募ったことである。このことにより、地元安代町の植樹祭への取組姿勢が積極的になり、経費的にもやりくりが以前より容易になった。そして、何といっても林業と関わりのない地域住民が１０数名参加していただいたことが大きな収穫であった。農繁期と重なり、あまり期待できないと考えていたが、「初めて木を植えてみた、結構楽しかった」、「営林署もこれまでと違ったことをやりますね」との感想が寄せられるなど試みは良い結果となった。

イ　民間とタイアップしての林業体験

当署では花巻市の南城中学校の生徒１２名を対象に下刈体験を実施した。これは安比総合開発が学校向けに企画した遠足のメニューで、生徒が安比高原で乗馬、バターづくり、林業体験などの中から一つを選んで体験するというものである。安比総合開発に対しては日頃から森林浴等のガイド役として営林署を活用していただくように要望していたところであったが、これはうまく実を結んだ形となった。下刈の参加者数が４つの選択肢の中で一番少なかった点は、子供さんの林業への関心の低さをあらためて認識させられる結果となったものの、引き続き全校生徒８６名を対象とした森林教室の反応はまずまずであった。まず森林と接する機会を提供することが重要であると感じた。

ウ　記念事業としての林業体験

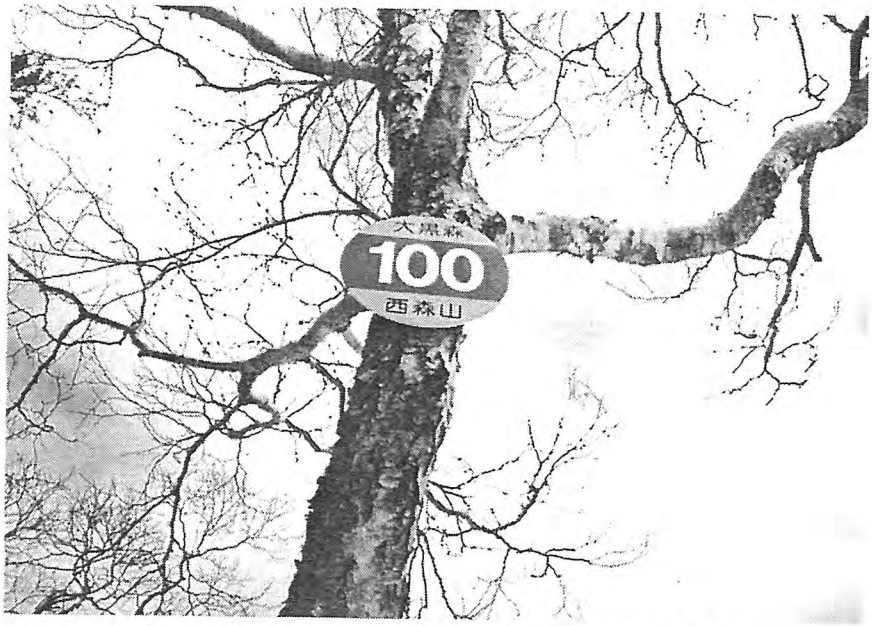
平成９年は新制中学校が一斉に創立５０周年を迎えた年だった。当署では管内の４中学校の希望を聞き、学校にゆかりのある木などを記念樹として寄贈する一方で、創立記念行事として全校生徒による植樹体験を各学校に呼びかけた。その結果、地元田山中学校が記念事業として取り組んでいただいた。豊かな森林に恵まれた安代町の中学生もほとんどが

今回、新しい標識の制作を町にお願いし、営林署と観光協会などでルートの確定、標識の設置、枝など障害物の撤去を行い、１００枚の新しいコース標識を整備した。標識は少々視界が悪くなっても確認できるよう色や設置場所を工夫し、また樹木に傷をつけないよう取り付けはゴムを使用した。

このコースでは昨年２月に単独でツアーをしていた方が遭難、死亡する事故が発生し、「安全上きちんとした標識の整備も必要では」という報道もあったばかりだった。今回の措置は新聞でも紹介されたため、当初主眼を置いていた観光面だけではなく、安全性向上に向けた迅速な対応についても強くアピールできる結果となった。

（スライド１：ツアースキーの様子）

（スライド２：新しい標識の設置作業の様子）



（スライド３：設置した標識　西森山終点）

イ　八幡平頂上の標柱設置

国立公園八幡平はどこに位置しているかご存じだろうか。アクセス面などから一般的に秋田県鹿角市と岩手県松尾村というのが一般の方の認識であり、観光情報誌等でも同様の扱いがなされている。しかしながら、八幡平はその山頂や八幡沼など重要な観光スポットが安代町に位置しているのである。安代町の大きな悩みは、この観光資源が全く町のＰＲに役立っていない点であった。

（スライド４：新しく設置した「八幡平頂上」の標柱（側方から撮影））

当署では町と相談して、まずシンボルである頂上に安代町の名を刻んだ標柱を建ててＰＲする計画をたてた。腐れにくく、地元で木造建築の土台としてポピュラーなクリの木を営林署が用意、設置する経費は町にお願いした。また、設置に際しての環境部局との交渉は営林署が行った。

頂上には国立公園指定時の小さな標柱が設置されており、同じ場所に２つもいらないという指摘を受けたが、環境庁担当官に現地をみていただき、必要性を理解していただいた上で何とか実現にこぎつけた。

設置直後から標柱をバックに記念撮影する光景が見られ、現地を訪れた町の関係者もこれで「八幡平の安代町」を観光客にＰＲできると大変喜んでいただいた。

（２）林業体験の新たな試み

植樹祭に森林教室。営林署が地域住民と現場で接する一般的でそれなりにＰＲ効果のあがるイベントである。しかし、植樹祭はともすれば関係者のお祭り、森林教室も特定の学校に限られていたのが当署の実態であった。そこで、森林・林業、国有林にもっと多くの地域住民が接する機会ができないものかと取り組んでみた。

ア　参加者公募による植樹祭

今年度の当署植樹祭は新しい試みを取り入れた。一つは署の行事ではなく町と営林署の合同の行事にしたこと。二つ目は参加者を一般から募ったことである。このことにより、地元安代町の植樹祭への取組姿勢が積極的になり、経費的にもやりくりが以前より容易になった。そして、何といっても林業と関わりのない地域住民が１０数名参加していただいたことが大きな収穫であった。農繁期と重なり、あまり期待できないと考えていたが、「初めて木を植えてみた、結構楽しかった」、「営林署もかわりましたね」との感想が寄せられるなど試みは良い結果となった。

イ　民間とタイアップしての林業体験

当署では花巻市の南城中学校の生徒１２名を対象に下刈体験を実施した。これは民間事業体が学校向けに企画した遠足のメニューで、生徒が安比高原で乗馬、バターづくり、林業体験などの中から一つを選んで体験するというものである。私たちは各方面に対し日頃から森林浴等のガイド役として営林署を活用していただくように要望していたところであったが、今回は遠足という形で実を結んだ形となった。下刈の参加者数が４つの選択肢の中で一番少なかった点は、子供さんの林業への関心の低さをあらためて認識させられる結果となったものの、参加者の反応はよく、引き続き全校生徒８６名を対象とした森林教室も好評であった。何よりも森林と接する機会を提供することが重要であると感じた。

ウ　記念事業としての林業体験

平成９年は新制中学校が一斉に創立５０周年を迎えた年だった。当署では管内の４中学校の希望を聞き、学校にゆかりのある木などを記念樹として寄贈する一方で、創立記念行事として全校生徒による植樹体験を各学校に呼びかけた。その結果、地元田山中学校が記念事業として取り組んでいただいた。豊かな森林に恵まれた安代町の中学生もほとんどが

初体験で、数人で協力して植栽している姿が印象的であった。このイベントはＰＴＡ等からも良い記念事業になったと好評で、学校の創立記念誌にも記された。

管内の細野小学校が、８年度の全日本学校関係緑化コンクールで特選に選ばれた。喜びに沸く学校に早速、受賞記念として親子による記念植樹の開催を働きかけてみた。何か記念となることを検討していたという学校は大変喜び、親子２代、３代による植林が実現し、参加した保護者の方々からも感謝の言葉を頂いた。

（スライド５：説明を聞く花巻南城中学校の生徒）

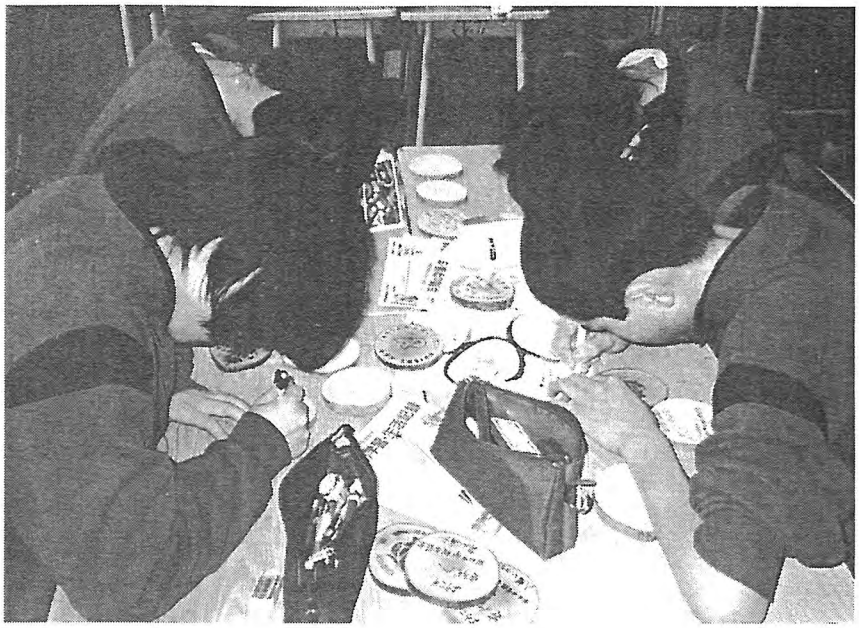
（スライド６：記念植樹する田山中学校の生徒）

（スライド７：親子による記念植樹の様子）

（３）イベントへの協力

安代町ではこの２月２５日から国民体育大会冬季スキー大会が行われる。当署では国体に参加する選手役員に対して記念品が贈られるということを知り、国体の事務局に豊かな森林に囲まれた安代町ならではの記念品を一つ入れてほしいと要望した。この考えはすぐに受け入れられ、ブナのコースターに地元の小中学生が激励のメッセージを書いて渡すということで話がまとまった。営林署では雇用延長された定期作業員も動員して２６００枚のコースターを作成した。地元特産品に偏りがちな参加記念品に地元をＰＲできる暖かみのある一品が加わったと関係者にも大変喜んでいただいている。

（スライド８：定期作業員によるコースター作成の様子）



（スライド９：中学生による激励ﾒｯｾｰｼﾞコースター作成の様子）

また、このコースターは地元幼稚園からの「クリスマスの工作の材料に使いたい」という要望にタイミング良く対応できることになり、小さな子供さんに木とふれあう機会を提供できた。

（スライド10：ｺｰｽﾀｰを使った工作に取り組む園児の様子）

3　研究の結果

（１）参加者の反響等

今回の取組の中で、林業体験については児童、生徒そして先生にアンケートを実施した。特徴的な点を整理すると以下のようになった。

ア　林業体験に参加した感想

林業体験については「結構おもしろかった」という感想があるなど全般的に好評であっ

たが、下刈りを体験した花巻の生徒からは、「暑くて大変」との声もあった。同じ学校の先生から、「大変さを経験できた点はよいが、きついけど楽しいものだという部分を体験できていない」との意見もいただき、「きつい作業の中に喜びを体験できるような工夫」の必要性を感じた。

イ　森林・林業に対する理解

体験等を通して理解が深まったという声は多いものの、先生に比べ生徒さんの反応は弱いという結果が得られた。この違いは、「意識を深めるため、今後どんなことが必要か」という質問の結果でも、「実践的行事を求める先生」と「レク的要素を求める生徒」という形で表れた。これは我々がどのようにして森林・林業についてＰＲしていくかを考える上で大変参考となるものであった。

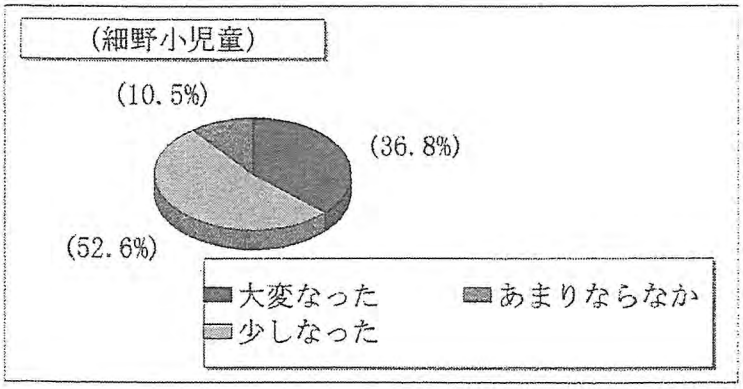
ウ　営林署についての理解度や要望

「営林署が身近になったか」という質問に、地元細野小学校の児童は「体験をとおして身近に感じるようになった」という答えが帰ってきたものの、花巻の生徒は「わからない」いう回答が多かった。これは年齢の違いはあるものの、これまで何らかの関わりを持ち続けてきた学校とわずか半日程度の関わりに過ぎない学校との差がでたものだと思われる。長い目で、継続して努力すれば良い結果が得られるという期待が持てるのだと考える。

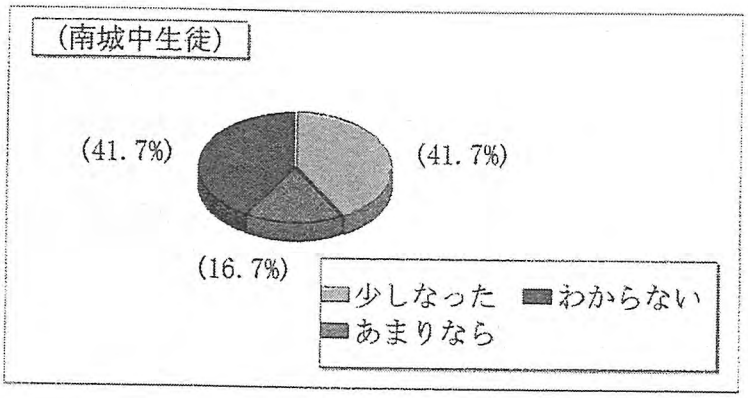
先生から営林署に対する要望がたくさん寄せられたが、森林にふれあう機会などを繰り返し提供してほしいという声が多かった。これも今後に大変参考となるものとなった。

表－1

問:　今回の行事で営林署は身近になったと思いますか？

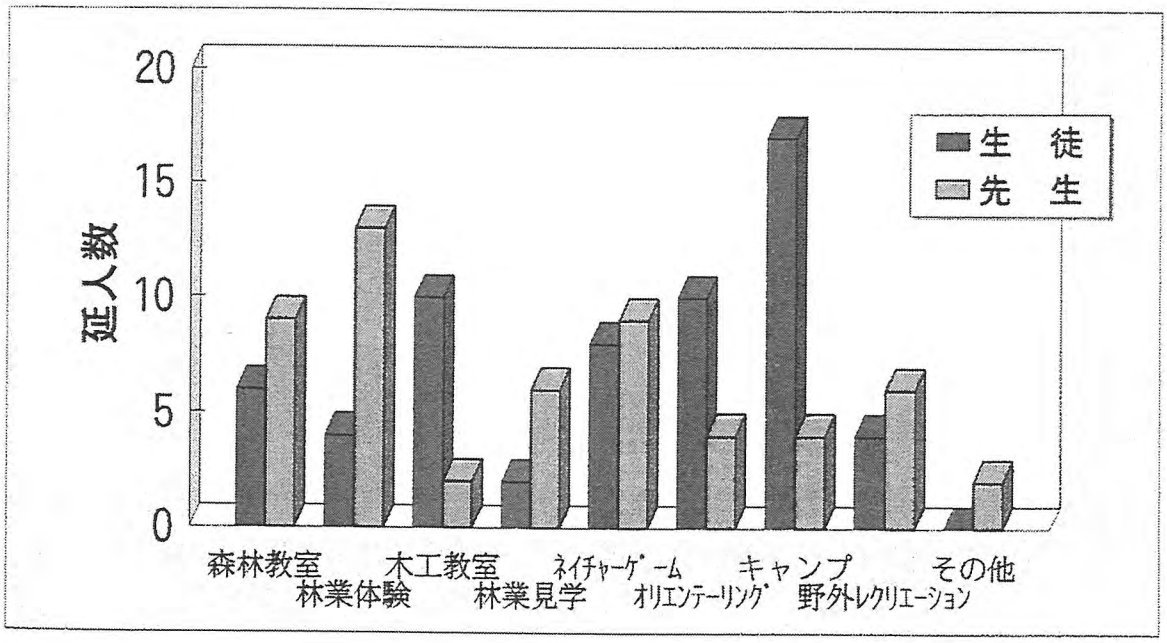


表－2



表－3

問：「森林や林業の意識を深めるためにじっさいにどんなことが必要か
また、どんなことをやってみたいですか？」



営林署への要望 ～営林署をより知ってもらうためには、どのような取り組みが必要だと思いますか？

営林署・国有林のＰＲ

- ◆ 営林署と国有林に触合える機会を持つこと。
- ◆ 実際一緒になって作業をする機会を持つことが有効ではないかと思う。
- ◆ 啓蒙活動を行う。
- ◆ 営林署の方々の日頃の見学があるとよいと思う。

林業や森林教育の普及

- ◆ 誰でもが参加出来る林業体験教室があると良いと思う。
- ◆ 森林での体験教室があるとよいと思う。
- ◆ 幼→小→高と森林学習をスパイラル方式で、何度も何度も学習し、触れ合う機会を持つことが必要かと思う。
- ◆ 各シーズンで（四季ごと）で実施する。
- ◆ 最近問題になっている水の問題について理解するためにも、森林が与える影響をＰＲして欲しい。
- ◆ 学校などで講演会を実施する。

教育・行政などの機関との連携

- ◆ 国有林を意義あるものとして行事の連携・共催が考えられる。
- ◆ 身近なものにするために、積極的な連携を深める。
- ◆ 情報提供を積極的に行う。
- ◆ 学校の活動への指導・支援（森林、木工教室など）を行う。
- ◆ 林業見学について連携、共催を図る。

ツアースキー安全に

八幡平―安比間のコース 新標識55枚設置

安代町と安代町観光協会（氷井幸一会長）、安代営林署（吉永俊郎署長）は十六日、松尾村の八幡平スキー場から安代町の安比高原スキー場までの林間スキーコースに新しい標識を設置した。

吉永署長はじめ営林署職員、安代町役場職員ら十人が参加。同日は八幡平スキー場の大黒森山頂（一、四四六㍍）からスタート、屋ノ根岳山頂（一、三九七㍍）付近までのコースに新しい標識五十五枚を設置した。

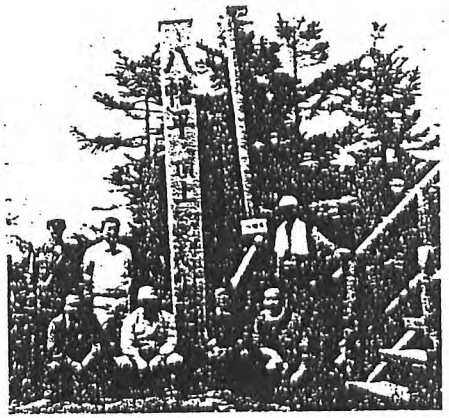
取り付けられた標識はアルミ製で直径四十㌢。参加者はコース途中の木に登り、ツアー客から見やすい位置に取り付けた。作業は十八日まで行われ、安比高原スキー場の西森山まで約五㌔のコースに合計百枚取り付ける。

アオモリトドマツに新しい標識を取り付ける参加者

八幡平頂上 ここは安代

町と営林署が標柱設置

浸透図り観光振興へ



建立した標柱を視察する安代町役場、営林署の関係者

安代町と安代営林署（吉永俊郎署長）は、八幡平頂上（標高一、六一三㍍）を示す標柱を設置した。アクセス道路や関連施設の場所から八幡平は松尾村や秋田県とのイメージが強いが、頂上や八幡沼などは安代町に位置している。新しい標柱には「安代町」の文字が入り、同町の観光関係者は「八幡平とともに町名を全国にPRしたい」と、意気込んでいる。

標柱建立は一帯の国有林を管理する安代営林署が計画し材料となる地元産のクリの木を提供、安代町が資金を出して実現した。今月初めに安比高原の森林資料館「ぶなの駅」で建立記念式典が開かれ、関係者が完成を祝った。

標柱は高さ五・一㍍、幅〇・三㍍で正面には「八幡平頂上 一、六一三㍍ 安代町」の文字が、横には「緑と水を育む国有林 安代営林署」「永遠に育む原生林 安代町」の標語が書かれている。

地図で見ると八幡平の頂上や八幡沼、原太森などは安代町に位置する。しかし、一般的には「八幡平の岩手県側は松尾村」のイメージが強い。標柱が完成してからは、安代町の文字をバックに記念写真を撮る観光客の姿も見られ町名が徐々に浸透している。

同町企画商工観光課の三浦栄吉課長は「頂上にはかつて安代営林署が立てた標柱があったが、風食し強風でなくなっていた。頂上の位置を知らせ、安代町をPRするため新しい標柱が役立っている」と、喜んでいる。

全国緑化コンクール特選

安代の細野小

さらに一歩、記念植樹

安代町細野の細野小学校（宮崎和夫校長、児童二千二人）は十三日、同町鶴飼山国有林で全国学校緑化コンクール特選受賞を記念する植樹をした。

児童、学校関係者のほかPTA会員、安代営林署、吉永俊郎署長の職員ら合わせて約六十人が参加。高橋校長は「長年にわたる学校林の活動や国有林での作業仕ぶりが認められ、賞を受けいただいた。今後も環境保全のための育林を続け、緑への思いやりの心を育てましょう」とあいさつした。

吉永署長は「森はたくさんの役割を担っている。森林の価値を理解し、森づくりもしてください」と述べ、職員が植樹の仕方を児童や保護者に説明した。

子供たちは、父母らの手助けで伐採地跡に杉の苗木百三十本を丁寧に植えた。記念の標柱を建て、受賞を祝うとともに今後も学校、地域ぐるみで森づくりに取り組んでいくことを誓い合った。

同校は学校林を利用した環境教育が認められ今年五月、宮城県白石市で開催された全国育林祭で最高賞の特選を受賞した。

親子で力を合わせ杉の苗木を植える細野小の児童

（２）取組の効果等

主な取組は町の広報に掲載され、町民に広く紹介されたほか、新聞社等マスコミにも情報を提供したことから、一部については新聞等でも取り上げられ、ＰＲ効果を高める形となった。また、国体記念品の作成は定期作業員の雇用延長期間の業務として活用できたことから、冬季業務に幅を持たせることができたばかりでなく、１０数万円の一署一品収入という結果を引き出すこととなった。

４　おわりに

今回、ある程度の成果をみたのは、過去の反省から以下の点について注意して取り組んだことも一因だと考えている。すなわち、

① 常日頃から情報収集に努めた　－各種会議や行事の中から、あるいは役場の関係者、地域の実力者等から様々な情報を集め、営林署が積極的に協力できるものか、署の業務等との調整は可能かなど実現の可能性や効果などについて時機を逸しないよう、早め早めの検討を心がけた　－受け身の対応を反省しての取組。

② 時間的な余裕を持って相手側との調整に当たった　－予算や人手あるいは時間のかかるものは、関係機関の予算編成や各種計画との調整が伴うため、自治体であれば予算を組む前から働きかけた　－着手遅れによる失敗を反省しての取組。

といった点である。しかしながら、経常の業務と平行しての取り組みは制約も多く、なかなかこちらの思うようにはいかない難しさがあると感じた。反響があるのは、裏返せばこれまでの取組不足を指摘されているとも言える。営林署と地域住民との距離はまだまだ遠いという現状を十分認識し、本当の意味で「国民の森林、国有林」とするため、住民に最も近い営林署の役割は一層重要性を増していると考える。今後とも「営林署もがんばっていますね」と多くの方に言われるよう地道に取り組んでいきたいと考えている。